

当科における微生物検査の検討

齊藤 達矢 楠 威志 古川正幸 池田勝久

順天堂大学耳鼻咽喉・頭頸科

【背景】日常診療で感染症を診療する際、細菌培養検査を実施するのは適切な抗菌薬を選択するのにあたり重要である。しかしながら、実地臨床の現場では迅速な対応が要求され必ずしも起炎菌を同定できないことも多い。そのため、広域スペクトル抗菌薬の安易な使用による耐性菌の増加が問題となっている。

【目的及び対象】2007年及び1997年に当科で実施した細菌培養検査において、①実施状況の比較②検出菌の動向③耐性菌の動向、に関し検討した。

【結果】①鼻漏及び耳漏の検体数の増加が顕著であった。②鼻漏、口腔咽頭に関しては、MSSAの検出が増加していた。耳漏においては、CNS、*Corynebacterium spp.*、*Candida parapsilosis*の増加が目立った。③*Haemophilus influenzae*は、10年前と比較してABPCに対して耐性化が進んでいた。*Streptococcus pneumoniae*は、EM、PCGに高い耐性化を認めていた。また、2007、1997年において、耳鼻咽喉科よりMDRPは検出されていなかった。

【まとめ】①10年前と比較して細菌培養検査の実施が約3倍となっていた。②MRSAの検出は鼻漏、耳漏及び口腔咽頭において増加傾向は認めなかった。③BLNAR、PRSPは増加傾向を認めていた。④当科より検出された*P. aeruginosa*は耐性化が進んでいなかった。